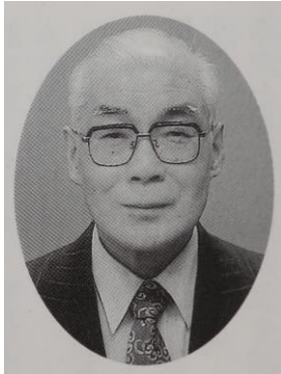


「昭和23年の学制改革に遭遇した世代の『思い出の記』(その5)」

《 相馬中学校に入学し相馬高校卒業となる等 》

相馬高校バレーボール部の生い立ち^(※1)

高普3回卒 羽生 賢次^(※2)



今年も春高バレー全国大会に出場と決まった。相高バレー部は福島県の優勝常連校となっており、相高バレー部の先輩として誇りに思っている。そろそろ全国大会ベスト4に顔を出しても良いところとさえ感じている。

馬城会原町支部の役員会の折、バレー部の先輩からお前は相高バレー部の生い立ちを後輩に教える義務があると云われ、文才に乏しい小生不承不承筆を執った次第です。

相高バレー部は昭和21年春、相馬中学校排球班として産声をあげた。相中46回卒の杉崎隆^(※3)先輩が初代主将で、班長(現・顧問)が故庄司国雄^(※4)先生でした。

バレー班は出来たものの物資不足の時代とて、バレーボールを手に入れるのは大変だった。バレーボールコートは、北庭の一角に作ったもののネットも無く、体育教官の細谷光先生の尽力で軍事教練で使った擬装網を班員一同が手作りで作ったと云う。擬装網利用でカラー模様のネットだったと。ボールは表皮が破れることが多々あり、それを家に持ち帰り針や糸で繕った。これは私が卒業するまで続いたと記憶している。とにかく、物資満ち溢れる現今では想像も出来ない苦難の時代でした。

後に福島県バレーボール協会長になられた故吉田孔彦^(※5)先生が北庭のコートに見えられたのは6月24日と記録されている。その時期吉田先生はまだ相中の先生ではなかった。誕生したバレー班は、庄司先生、吉田先生のコーチのもと練習に励んだ。チームメンバーの大半が汽車通のため全員揃っての練習が毎日とはいかなかった。

昭和21(1946)年9月、終戦後第1回福島県中学校体育大会の浜通り予選に初めて参加、磐城中学と対戦し敗退したが、大会終了後、優勝した平商業と練習試合をした。そして2-0で勝利した。相中バレーの初勝利だったのです。

昭和22(1947)年の第2回中学校体育大会では、準決勝まで進出しました。中学校体育大会はこの年で終わった。

昭和23(1948)年から高校時代が始まる。昭和23年4月から吉田先生が白河女子高校に転任、以後体育関係の指導者不在の3年間を迎えることになる。でも、チーム全員の努力、暇を見ては指導に駆けつけて下さった吉田先生の教えと、当時発行されていた機関紙『バレーボール』を前、中、後衛、全員のため4部の購入を学校にお願いし、紙中の連続写真等を勉強したり、相女高の持館先生に教えを頂く等バレーボールにドブプリと浸った高校生活の日々でした。

昭和23年高校バレーボール大会で福島高校を破り初優勝。私は幸運にも前衛ライトで出て相馬高校バレー初優勝の感激を味わった。秋は第1回福島県総合体育大会に優勝。金沢国体の出場権を手にしたが経済上の理由で棄権。今思うと勿体ないことをしたと。

昭和24(1949)年高体連大会、国民体育大会の県予選に優勝。西宮の高校大会は資金不足で棄権。横浜国体では、夕闇迫る三沢競技場で滋賀県代表と対戦、勝利したとき、都下居住の先輩達が声高らかに校歌『馬陵の城の名に負える・・・』を歌って頂き感涙したものでした。

昭和25（1950）年も県大会全てを勝ち抜き全国高校大会（富山市）、国民体育大会（愛知県・岡崎市）に出場。

高校全国大会では、1回戦地元富山県・高岡東部高校に1-2の大接戦で負けましたが、1回戦敗戦チームからただ一人私・羽生が東軍選手として選抜され、1週間全日本クラスの監督・コーチに教えを受けました。東軍が勝利し、翌年発行された機関紙『バレーボール』で参加チームから7人が今年のホープとして紹介されその一員になったことは嬉しく誇りに持った次第です。

岡崎国体では3回戦まで戦いました。吉田先生にもっともっとコーチされていれば・・・、の感ひとしおでした。吉田先生のコーチがあれば、準決勝進出も可能だったと。

南東北地区（福島県、宮城県、山形県）の三県対抗バレーボール大会が昭和24年から始まり福島県は相馬高校単独のチームで出場優勝を続けました。他県チームは県下選抜チームでした。

私がキャプテンを勤めた昭和25年の相高チームはゲームの途中や不利な立場に立った時は、皆でコート上で集まり握り拳を示しながらメダルを握るのだ、メダルを持って帰るのだと気合を入れ気を締めたものでした。

私が高校卒業後、吉田孔彦先生が相馬高校に戻られ相高バレー部は4年間福島県内勝ち続け相高バレー部の第1期黄金時代を創りあげました。

吉田孔彦先生の教え子には、オリンピック金メダルの佐藤哲夫^(※6)君がおり我が相高バレー部OB会の誇りである。また福島県内の優秀監督としては埴満^(※7)先生、目黒博^(※8)先生、荒仁^(※9)先生（現・氏家）、斎藤洗且^(※10)先生、宮崎正恵^(※11)先生、村岡弘^(※12)先生、島紘一^(※13)先生、荒木賢^(※14)先生、浜名邦光^(※15)先生、須田紘一^(※16)先生、荒伸一^(※17)先生、羽根田一弘^(※18)先生、等錚々たるメンバーが居り、福島県バレーボール界の発展に寄与している。

私もバレーボールから足を洗った身ながら、気持ちは福島県バレーボール界の発展向上に些少ながらお手伝いと考えて県バレーボール協会の参与の役を仰せ付かっている。相双地区高体連大会には時間の許す限り出席し後輩のプレー振りを見つめている。

相高バレー部員は卒業時に、後輩連中にメッセージを数多く残されている。現在相高バレー部の試合の時コート側に掲げられている垂れ幕に『3F』の言葉を見ることが出来るが、あれは相高バレー部OB会初代会長を勤められた相中第46回卒熊耳敏^(※19)先生の『3F説』から出ている。

熊耳先生は云う。3Fは

- ① Friendship ② Fair play ③ Fighting spirit

の頭文字3つのFのことである。

熊耳先生は第一に『フレンドシップ』を掲げられている。『友愛の精神』を大事にしている。バレー部に入って得た第一のものと反省している。

第二に『フェアプレイ』『正々堂々の勝負』をモットーとしている。いくら上手であっても勝つことだけにのみ没頭して居るようでは明朗そして快活にはできない。下手であっても正々堂々としている方がきれいです。と。

第三に『ファイティングスピリッツ』『いわゆる闘争心』を磨くことを常とすることを勧められている。競技には旺盛なる闘争心が必要だ。その闘争心は無茶苦茶でなく極めて紳士的であるべきだ。獣的であってはならない。と。

このように相高バレー部創立の先輩は後輩のわれわれに精神的な指針を示されている。この『3F』が今の相高バレー部に生きているような気がする。

今年の相高バレー部員は小柄であるが、それなりにレシーブ、アタックに持ち味を出している。組合せによっては大仕事をするような気がしている。

相高バレー頑張れ！やってやれない事は無い！

君たちが新しい相高バレーの新しい時代を創るのだ！

- (※1) 創立110周年記念誌「紅の旗」より。
- (※2) 昭和26(1951)年卒。原町出身。
- (※3) 会員名簿では、昭和24(1949)年、高普1回卒となっている。飯豊出身。
- (※4) 昭和9(1934)年卒 相中第32回 中村出身
- (※5) 昭和17(1942)年卒 相中第40回 中村出身
- (※6) 昭和42(1967)年卒 相高普第19回 中村出身
- (※7) 昭和25(1950)年卒 相高普第2回 鹿島出身
- (※8) 昭和26(1951)年卒 相高普第3回 駒ヶ嶺出身
- (※9) 昭和27(1952)年卒 相高普第4回 山上出身
- (※10) 昭和26(1951)年卒 相高普第3回 駒ヶ嶺出身
- (※11) 昭和30(1955)年卒 相高普第7回 中村出身
- (※12) 昭和27(1952)年卒 相高普第4回 中村出身
- (※13) 昭和35(1960)年卒 相高普第12回 山上出身
- (※14) 昭和36(1961)年卒 相高普第13回 中村出身
- (※15) 昭和36(1961)年卒 相高普第13回 鹿島出身
- (※16) 昭和38(1963)年卒 相高普第15回 中村出身
- (※17) 昭和42(1967)年卒 相高普第19回 中村出身
- (※18) 昭和61(1986)年卒 相高普第38回 飯豊出身
- (※19) 昭和22(1947)年卒 大甕出身。 記念誌『相中相高八十年』の第四部「思い出の記」の編集、及び『相中相高百年史』の第二部の六、勤労奉仕作業と通年勤労働員の執筆者である。

(転記など 村山)